ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.21 No.7 July 2020

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

7

CONTENTS

- 巻頭言
  信者の確定
  ／永尾教昭 …… 1
- 「おさしづ」語句の探求（41）
  「おさしづ」第５巻における教会事情と「道」
  ／澤井治郎 …… 2
- 日本語教育と海外伝道（24）
  歴史の中の留学生③
  ／大内泰夫 …… 3
- キルケゴールで読み解く 21 世紀（22）
  宗教間対話と信仰内対話―ブーバーとキルケゴール
  ／金子　昭 …… 4
- イスラームから見た世界（３）
  天理教とイスラームの出会い①
  ／澤井　真 …… 5
- ライシテと天理教のフランス布教（21）
  フランスの新型コロナウイルス
  ／藤原理人 …… 6
- 遺跡からのメッセージ（59）
  絵画土器のメッカ、唐古・鍵遺跡と清水風遺跡
  ／桑原久男 …… 7
- 現代宗教と女性（28）
  魔女狩りとは何であったのか
  ／金子珠理 …… 8
- 宗教伝統における聖典の意味構造（新連載）
  宗教研究における「聖典」再考
  ／澤井義次 …… 9
- 図書紹介（118）
  『アフリカの森の女たち―文化・進化・発達の人類学』
  ／堀内みどり …… 10
- おやさと研究所ニュース …… 11
  2020 年度公開教学講座の案内

巻頭言

信者の確定

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

天理教の海外布教を持続的に発展させていくためには、各国にある布教拠点で、①信者であることを認知する、言い換えればイニシエーションの方法、②その地に信者共同体ができた場合、それをオーソライズする手続き、そして③信者たちが各地にいてその信仰を高めていくためのシステム、この３つの確立が不可欠だろう。すでに述べたように、①については現実には、ぢばに帰り別席を運ぶことがそれに取って代わっているが、本来その地でまず信者になってから、というのが順序だろう。とりわけ日本に行くことが経済的に極めて困難な発展途上国では、当然それが重要になってくる。②は①が確立したら自然にできていく。③については、いずれ考察していきたい。

では、そもそも天理教では、どういう人を信者というのか。当然、天理教で説く神を信じ、その教義を信奉する人だろう。では、信者を客観的に明確にする方法はないのだろうか。コンゴ共和国で布教に勤（いそ）しんだ森洋明氏（現天理大学教授）は、信者であることを自他に明確にする具現化された確証が必要とであるとし、同地でも試行錯誤の末「信者手帳」の給付という形を取ったと述べている。[(1)] 信者として確定させることは、教団側にとっては一つの「縛り」になるし、当人はそれによっていわゆる帰属意識が高まり、奉仕・布教活動に邁進しようという意識が一層高まる。

「天理教教規」の内、一般教会規定第六章第 41 条に「信者とは、天理教の教義を信奉する者で、教会の信者名簿に登載されている者をいう」（強調筆者）とある。『稿本天理教教祖伝』によると、すでに明治13年には講社名簿が作成されたとあり、そこには 1,442 名が記載されている。恐らく、その後陸続と増えていく各地の講でも同じように名簿が作成されていったと考えられる。

やがて講は教会となり、そこにも信者名簿を備え、入信した人の名前を登録していった。しかし、筆者の知る限り、現在この規定を厳密に守っている教会は、あまりないように思う。その理由の一つは、信者が著しく増えていったからだろう。同時にやめてしまう人もいるわけで、それをいちいち意思確認し、登録あるいは抹消していかねばならない。亡くなる人もいるだろう。その作業があまりにも煩雑になっていったからではないだろうか。

それはともかく、海外ではこの方法を今一度、用いてはどうかと思う。ただし、日本から来ている既信者の記載は不要で、あくまでも現地で入信した人だけで良いと思う。地域の中心的拠点である伝道庁、出張所と言われるところで、ノートを作り、本人が納得した上でこれに記載をしていく。このことによって、信者であるということを自他共に認識していく。そうすることで、②の信者共同体のオーソライズも自然に可能になっていく。その構成員が信者であれば、それがすなわちオーソライズされたことになる。そして共同体ができれば布教師が常時丹精することのできない遠隔地でも、信者たちが自立して祭儀や教理の習得に努めることができる。そして、それがそのまま布教になる。考えてみれば、この経緯は原初において日本国内で天理教が伸びていったそれでもある。

こうしていわば「輸入もの」であった天理教が、その国で自前のものになっていく。結局、海外布教とは、原初から教団が発展していった形を、海外の地で再生させることだろう。

［註］

（１）森洋明『伝道宗教による異文化接触―天理教コンゴ伝道を通じて―』（グローカル新書）、天理大学出版部、2013 年。